

## ヘルダーと翻訳

嶋田 洋一郎

(九州大学)

*Herder was one of the significant literature critic and poet. He dealt with the translation theoretically as well as practically in Germany in 18th century.*

*In my paper Herder's translations are treated with three aspects. Firstly: the role of the translation in those days. Secondly: the translation as the movement to expand the own language. Thirdly: the translation as a creative reproduction.*

*This period in Germany could be described as the century of the translation. The translators' purpose was to generate an own literature in the mother language. Then German played an essential role. The translation as a result contributed to expanding of the own language. Herder in this context attached importance to development of the poetic language. For him the translation was not only a simply reproduction, rather a creative act to establish the classic German. Thus the translation was raised from a subordinate position to an independent activity.*

### 1. はじめに

ヘルダー (1744-1803) 最初の文芸作品『キュロスに寄せる歌』(1762) は、ヘルダー自身の創作であるにもかかわらず、表題に添えて、「一人の囚われのイスラエル人によってヘブライ語から翻訳された」(29, 3)<sup>1</sup>と書かれている。そこには政治上あるいは宗教上の検閲を避けるために著者であることを隠蔽しようとするヘルダーの意図が見られる。こうした手法の先例としてはヴォルテールの『カンディード、あるいは楽観主義。ドイツ語のテキストからのラルフ博士による翻訳』(1759)がある。これらの場合も含めて、18世紀後半のヨーロッパにおいては翻訳が文芸活動全体においてさまざまな形で重要な役割を果たしている<sup>2</sup>。ヘルダーにおいても翻訳の持つ意義は決して少なくない。事実また最初期の『断想集』(1767-8)における理論的省察から『民謡集』(1778-9)などを経て最晩年の『シッド』(1802)に至るまで、翻訳との関わりは著作活動の全体に及んでいる。

『断想集』においてヘルダーは「真の翻訳者は同時に哲学者、詩人、文献学者でなければならない」(1, 274)と述べているが、翻訳者に対するこうした過大ともいえる要求のうちこそ、ヘルダーにとっての翻訳の意義が明示されているように思われる。このヘルダーの要求の実体を明らかにすべく、本稿では『断想集』を中心にヘルダーと翻訳の関係を次の三つの観点から考察する。第一は18世紀後半のドイツにおける翻訳の役割、第二は自己の言語空間拡大の運動としての翻

---

SHIMADA Yoichiro, "J. G. Herder and the Translation," *Interpreting and Translation Studies*, No.11, 2011. pages 15-23. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

訳、そして第三は「創造的な再生産」(1, 395) としての翻訳である。

## 2. 18 世紀後半のドイツにおける翻訳の役割

### 2. 1. 当代ドイツ文学の実情

ポレドリも指摘しているように(Polledri, 2011: 11)、翻訳の数が前世紀の五倍にもなった 18 世紀のドイツはまさに翻訳の時代であった(Zeller, 1982)。そうしたなかでヘルダーは、古代オリエント、ギリシア、ローマ、そして近代の北方の翻訳があふれている当時の状況を巨大な立像になぞらえて次のように概観している。

頭部はオリエントの金で、私の目を眩ませる。なぜならそれは太陽光線を反射するからだ。高く盛り上がった胸部はギリシアの銀で輝いている。腹部と大腿部は堅固なローマの銅だ。しかしその脚はガリアの粘土の混ざった北方の鉄なのだ。(1, 364)

ここでのヘルダーは、金・銀・銅で象徴される古代に比べて、鉄に象徴される近代ドイツなどの北方が低い位置にあると考えている。その背景には当然ながら、17 世紀にフランスで起こった新旧論争の影響が見てとれるが、18 世紀当時のヨーロッパにあつていけば規範化された古典古代の世界を代表する文学作品は、言うまでもなくホメロスの叙事詩であり、ヘルダーの関心もこのホメロスの翻訳に向けられていた。しかもこの問題をめぐってドイツとフランスでは次のヘルダーの文章に見られるように、立場がまったく異なっている。

フランス人は自らの国民趣味を非常に誇りにしており、すべてをこの趣味に近づけ、自らを他の時代の趣味に従属させるようなことはしない。ホメロスは敗北者としてフランスにやって来て、自らを彼らの流行に従って装わねばならない。(.....)これに対して我ら哀れなドイツ人は読者も祖国も国民趣味という暴君もほとんど持たないため、ホメロスをありのままに見ようとする。(1, 290)

ヘルダーによればフランス人によるホメロスの翻訳は、翻訳理論で言われる目的言語への忠実さに重点を置くものである。言い換えれば、翻訳者は著作家と見なされ、翻訳は原典ではなく読者に仕えるものであった。これに対してドイツ人は起点言語への忠実さを重視せざるをえない立場にあり、それはまたドイツではフランスのコルネイユやラシーヌのように文芸創作の規範となる作家に対抗できるほどの国民作家がまだ存在していなかったことの裏返しでもあった。翻訳をめぐるこうした状況はベルマンの言うように、「当時のフランス文化がヨーロッパで占めた支配的な地位と見事なまでに合致している」(ベルマン、2008:78)。ちなみにヘルダーは当時のドイツの文学状況について『断想集』第一集の序文において以下のように書いている。

我々のドイツにおける著作の状態はまるであのバベルの混乱のようだ。趣味における派閥、文学における党派、哲学における学派が互いに争っている。中心地もなければ、共通の関心もない。偉大で全体を見る促進者もいなければ、共通の法則を与えるような天才もいない。(1,

141)

## 2.2. ドイツ文学における基底としてのホメロス翻訳

こうした状況のもとでヘルダーは文芸創作の規範となるような原典あるいはオリジナルをホメロスの翻訳に求めるが、それはまたヘルダーから見れば、ホメロスに匹敵するようなドイツ語によるオリジナルの作品を持ってないドイツの文芸状況の反映でもあった。ヘルダーはこう述べる。

もし誰かが我々のために文芸の父ホメロスを翻訳してくれるならば、それはホメロスが長い間あらゆる神および人間の叡智の源泉であったように、ドイツ文学にとって永遠の仕事、天才にとって有益な仕事、古代のムーサおよび我々の言語にとっての貴重な仕事になるであろう。そしてホメロスがギリシアおよびローマの文学の中心点となり、我々の文学にとって最大のオリジナルとなったように(.....)こうした仕事のすべてはホメロスの翻訳となる。(1, 289)

したがって当時のドイツで翻訳者に課せられた使命は、外国語から母語への翻訳作業を通じて、独自の文学の創作およびドイツの文化全体の向上に資するという点に求められよう。そのため翻訳者には「真の翻訳者は同時に哲学者、詩人、文献学者でなければならない」(1, 274)と言われるように<sup>3</sup>、作家と同じくらい重要な役割が与えられることになり、同時にまた翻訳の土台となるドイツ語に関する省察も翻訳と関連づけて行われる必要が生じたと考えられる。

## 3. 言語空間拡大の運動としての翻訳

### 3.1. 異化的翻訳

「ホメロスをありのままに見ようとする」(1, 290)というヘルダーの言葉にもあるように、ドイツ独自の文学創作の前提となるのは起点言語つまり原典への忠実さによって特徴づけられる翻訳作業であった。「我々はすべてを見る世界市民として自らを他の民族の心臓部に移し置かねばならない」(2, 114)と語るヘルダーにとって、翻訳という行為は何よりも自分自身を異なる文脈の中に移し置く作業であり、それゆえ翻訳者の第一の使命は、読者を外国語の作品が書かれた国へと移し置く点にある。その意味でヘルダーが最初に要求するものは、異なった文化の中に読者を移し置く異化的翻訳法であり、そのためにも翻訳者はまず原典の「言葉の意味を探求する」(1, 286) 文献学者でなければならない。

しかしヘルダーによれば、翻訳者に求められるものは起点言語に関する文献学的能力だけではなく、翻訳の対象となる作品についての広範な知識と批判的な視点である。「最良の翻訳者は最良の説明者でなければならない」(1, 273)と述べるヘルダーは、たとえば「ホメロスにおける最良の翻訳」(1, 290)に「高度の批判精神における注釈と説明」を求める。これは言うまでもなく本稿の冒頭で引用した「真の翻訳者は同時に哲学者、詩人、文献学者でなければならない」(1, 274)という文章における哲学者と文献学者に対応していると思われる。

さらに興味深いことに、ヘルダーはまた別の個所で「哲学の眼でもってギリシア文学の精神を覗き込み、美学の眼でもって精緻な美点を分析し、それから歴史の眼でもって、時代と時代、国と国、天才と天才を対比させねばならない」(1, 286f.)とも書いている。すなわちそこでは、哲学者と詩

人と文献学者に加えてさらに歴史家という視点が翻訳者に求められ、それによってヘルダーは翻訳という行為に、作品の逐語的翻訳を超えて、作品世界を支える精神や作品の背後にある歴史や文化の紹介までも期待していることが分かる。

そこで実際に問われねばならないのは、ベルマンの言うように「どういった翻訳領域が拓かれねばならないのか」(ベルマン、*op.cit.*: 87) ということと「なぜ、そしていかに翻訳すべきか」ということであろう。言い換えるならばそれは、ヘルダーが翻訳という行為を通じて当時のドイツ文学にいったい何をもたらそうとしていたのかを問うことにほかならない。

### 3.2. 母語の改善あるいは拡充

ヘルダーが何よりも重視するのは、翻訳の土台となるべき母語のドイツ語であった。すなわちこの時期のドイツにおける翻訳の課題としてヘルダーの念頭にあるのは、文献学者に求められるような原典への忠実さのみならず、母語であるドイツ語の形成と改善という問題であった。そしてこの問題は、翻訳という大きな枠組みの中で考えられているからには、当然ながら、次の文章に見られるように、外国語の学習と結びつけられるべきものである。

私は自分の言語を忘れるために外国語を学ぶのではない。また自分の教育の礼儀作法を交換するために外国の諸民族のもとへ旅するのでもない。実際そのようなことをすれば、私が失うものは得るものよりも多いただろう。そうではなく私がかつたら諸外国の庭園を歩いて歩くのは、自分の思考様式の婚約者として自分の言語のために花を摘むためなのだ。私が異国の習俗に目をとめるのは、異国の太陽が成熟させた果実のように自分の習俗を私の祖国の守護神に捧げるためなのだ。(1, 401)

いずれにせよ文献学者の前提条件である外国語の学習という問題もヘルダーにあっては母語のドイツ語の形成と不可分の関係にあり、それによって翻訳者も母語の形成に積極的に関わるという意味において創作者にも匹敵する地位を得るべきものとなる。ただしこうした考え方はヘルダー独自のものではなく、当時のドイツの文芸界で徐々に形成されつつあったものであることは、たとえば当時の哲学者で批評紙『文芸書簡』(1759-65)の同人であったトマス・アプトの言葉からも明らかである。ヘルダーは『断想集』において次のようにアプトを引用している。

真の翻訳者は、外国語著作を自国の読者が理解できる以上のことを目標に定める。この狙いゆえに真の翻訳者は作者の地位に引き上げられ、一介の小売店主から、国家を実際に富ませる一廉の商人へと格上げされる。その意図は、翻訳者の母語に、より完成された言語という規範に従って、傑出した思想を適合させる点にある。(1, 171f.)

これに対する注釈としてヘルダーは翻訳に関する三つの命題を提示する。一つは「真の翻訳者は自らの母語の言葉、言い回し、接続語を、より完成された言語から、なかでもギリシア語とラテン語から、そしてまた近代の諸言語から適用しなければならない」(1, 173) というものである。第二は「古代のどの言語も古代の諸国民やその作品一般と同じく、近代よりも特徴的な要素を持ってい

る」というものであり、第三は「我々の視野からはいつも言語の青年期固有の最良の詩人たちが見失われる。なぜなら彼らは小手先の著述業者が現れる前に姿が見えなくなるからだ」というものである。

これらの命題で最初の二つはアプトと同じように諸外国語から学ぶことによって母語の改善と拡充をはかることを意図しているが、第三の命題は、通常の散文よりも詩人による詩的な言語の形成に重点を置いている<sup>4</sup>。というのも『断想集』における言語の年齢の比喻によれば、当時のドイツ語は少年期の詩的で感覚的な言語の時代を過ぎており、そのまま進めば「美しさに代えて正確さや完全性」(1, 155) を重視する老年期の哲学的な言語の時代に入ってしまうからである。ヘルダーは現在のドイツ語が置かれた時代を成年期としてとらえ、その特徴を「美しい散文」(1, 154) の中に見ようとする。これは「少年期の財産を控えめに使い(……)、倒置法の自由を哲学的な構造の束縛を取り入れることなく抑制し、詩的な韻律を散文の快い響きにまで下げて合わせ、以前の自由な語順をより多く総合文のなかに組み入れた」(1, 155) ものである。

ヘルダーはさらにこう述べる。「なるほど我々は両方の側で最高の段階に到達することはできない。なぜなら両方の端は一つの点を形成しえないからである。であれば我々は真ん中を漂うことにしよう。そして感覚的な言語からは翻訳と模倣によって借り、他方また借りたものを哲学の省察によって按配よく適用しよう。」(1, 158) すなわちヘルダーによれば当時のドイツ語は哲学的言語には知性の訓練によって近づきうるが、詩的な少年期はもはや回復不可能であり、それはもっぱら「翻訳と模倣」によってのみ再び獲得しうるものなのである。そこで次に問われねばならないのは、こうした詩的な言語は実際にどのような翻訳を通じて実現されうるのかということであろう。

ヘルダーは当時の詩人カール・ヴィルヘルム・ラムラーらによって行われていたホラティウスの頌歌(Ode) の翻訳について、ラムラーを「ドイツのホラティウス」(1, 183) と呼び、ラムラーによる翻訳は「我々の言語をきつと豊かなものにしてくれるだろう」と述べている。ちなみにヘルダー最初期の作品である『頌歌に関する断想』にも見られるように、ヘルダーにとってはこの頌歌というジャンルこそが「文芸の起源」(32, 83) にほかならない。そして次のように賞賛される「頌歌の天才」とはまさに哲学者、詩人、文献学者が一体となった翻訳者とほとんど変わらない存在である。ヘルダーは言う。

頌歌は詩的感覚の第一子である。そして頌歌を実り豊かな発展のための溢れんばかりの種子と見なすために必要なのは頌歌の天才であり、詩人の魂を動かす梃子に精通した者である。頌歌は文芸の起源であり、また頌歌の天才はオリエントの最も神聖なもの、ヒエログリフの謎、オルペウス教およびエレウシス祭の神秘、そしてその神聖な檜の森においてドルイドの司祭の宣誓に必要とされるため同時に古代の精通者でもある。それゆえに、この詩人としての文献学者は周囲の諸国民の精神を知り、そして上述の状況の覆いの中にこれらを養う核を見出すためにはまた哲学者でもなければならない。この三つの頭を持つ者(triceps) はどこにいるのか。(32, 83f.)

#### 4. 創造的な再生産としての翻訳

##### 4.1. 模倣と独創性

このように翻訳作業に際してヘルダーが根底に置く方法は「頌歌の天才」のために定義しておいたものである。そしてこのことは何よりもヘルダーにとっては翻訳という行為がたんに内容紹介といった再生産のジャンルではなく、自ら創造的な行為として構想されていたことを物語っている。しかし言うまでもなく、翻訳は創作のように無からの純粋な創造ではありえない。そこでヘルダーが提示するのは「創造的な再生産」(1, 395) あるいは「コピーするオリジナル」(2, 162) といった一見矛盾するような考え方である。その背景には、古典修辞学以来ずっと芸術論において議論されてきた模倣と独創性という問題が存在する<sup>5</sup>。

こうしたヘルダーによる撞着語法的な発想を翻訳の領域で支えるのは、オリジナルの模倣(Nachahmung)ではなく、オリジナルとの競合(Nacheiferung) という概念であり、その目標は、模倣を到達点とすることではなく、他者の模倣を通じて自己の独創性の発見に至ることである。「芸術家たちにギリシア人の秘密を遠くから開示してくれたヴィンケルマンと同じように、我々にギリシアの哲学と文学の神殿を開示してくれるもう一人のドイツのヴィンケルマンはどこにいるのか。」(1, 293) と語るヘルダーは、まずヴィンケルマンと同じようにギリシアをドイツに紹介する翻訳者の出現を要請するが、続けて次のように述べる。

しかし詩人たちの意図におけるヴィンケルマンのような人物はドイツにおいても現れうる。(.....)このような人は我々にギリシア人の真の理想を彼らのあらゆる種類の文学において模倣のために示すべきであり、そして彼らの個性的な点、国民的で地域的な美点を示すべきであるが、それは我々をこうした模倣から脱出させ、我々を我々自身の模倣へと鼓舞するためである。(1, 294)

#### 4.2. 規範の確立

ヘルダーにとって翻訳の究極の目標は、原典をそのまま母語に置き換えることではなく、原典と異なる新たなものを産み出すことにある。しかしそれは原典をまったく無視することを意味するのではなく、翻訳において目標言語であるドイツ語の新たな規範を確立することを旨とするものである。これについてヘルダーは次のように述べている。

ホメロス、アイスキュロス、ソフォクレスは、完成された散文をまだ持っていなかった言語(筆者注:ギリシア語)に美しさを与えた。彼らを翻訳する者は、こうした美しさを、韻律においてもヘクサメターにおいてもなお散文にとどまる言語に移植し、こうした美しさができるだけ失われないようにした。かの翻訳者たちは思想を言葉に、感覚を形象に包み込んだ。このように翻訳者は原典と自らの言語の要求に応えようとするならば、自らが創造的な天才でなければならない。ドイツのホメロス、アイスキュロス、ソフォクレスは、かの翻訳者たちが自らの言語においてそうであったのとまさに同じようにドイツ語においても規範的であってこそ記念碑を打ち立てるのである。しかもその記念碑は卑小な師匠や学校教師の目にこそとまらないが、その静かな偉大さと単純な壮麗さによって賢者の目をとらえ、<後世と永遠にとって神聖なり！>という銘文に値するのだ。(1, 178)

ここでのヘルダーは、「真の翻訳者は作者の地位に引き上げられる」(1, 171)というアプトの言葉を念頭に置きながら、その後のシュトルム・ウント・ドラング時代に文学創作の領域で要請される「創造的な天才」という概念を、それまでは主として原典に追随するだけの二次的な意義しか認められていなかった翻訳という行為に転用しようとしていると考えられる。すなわちそれは受動的な翻訳観から能動的な翻訳観への転換でもあった。ちなみに上述の引用文における「規範的」という形容詞の原語は<klassisch>であり、そこには翻訳を通じて鍛え上げられるドイツ語こそが、将来的にはドイツ文学の規範あるいは原典の土台となるべきであるという強い願望が込められているといえよう。しかもこのようなドイツ語には、母語という甘えを捨てて、むしろ外国語に対するかのような厳しい姿勢が要求されることは、「真の翻訳者は同時に哲学者、詩人、文献学者でなければならない」(1, 274)というヘルダーの言葉の真に意図するところであったと思われる。

## 5. 結論

そこで本稿の最後で問われるべきは、ヘルダーが実際にどのような翻訳を目ざしたのかということであろう。ヘルダーが翻訳の基本理念とするのは、原典の「音調」(Ton) を保持するということである。すなわちそれは、原典の正確な逐語訳というよりもむしろ作品の精髓を、最終的には読者に訴えかける響きに乗せて提示する翻訳であると思われる。このことをヘルダーは音楽を想起させる「主要音」(Hauptton)(1, 395)という言葉を使いながら次のように説明している。「翻訳者はテキストの外的構造から、作品を特徴づける主要音を聴き取り、それを創造的な再生産という行為において自らのテキストのなかで技巧を凝らして提示しなければならない。」これについてヘルダーは『批評論叢』第一巻(1769)においてホメロス为例にとりながら次のように述べているが、そこでは吟唱詩人としてのホメロスの理想的な翻訳のあり方が語られている。

私があたかもホメロスを聴くような、そして自ら彼を翻訳する場合にのみ私はホメロスを読む。彼は私にギリシア語を歌って聞かせてくれる。そしてまさにかくも早く、かくも調和的に、かくも高貴にドイツ語による私の思想は彼の後を追って飛ぼうとする。こうしてのみ私は自分と他人にホメロスについて生き生きとして確固とした説明ができ、彼を魂全体で感じとせることができる。そうでなければ、私の思うに、ホメロスを我々は注釈者として、スコラ学者として、学校教師として、あるいは語学生徒として読んでいたのであり、こうした読みは不確実あるいは死んだものなのだ。(3, 126f.)

ヘルダーにあつて重要なことは、こうしたいわば音楽のように人間の魂全体に訴えかける翻訳が、同時に新たな詩的なドイツ語の形成につながるべきものであったということである。そして『断想集』以降のヘルダーは『オシアン論』(1773) や『民謡集』において、特に歌われることを意識した詩の翻訳のあり方を実践的に追求することになる。そこではさらにホメロスやオシアンを題材としながら、口承文芸をいかに書き言葉に移し置くかという問題(いわゆる「声の文化と文字の文化」の問題)や、翻訳されるべき原典を外国のみならず自国の古い文芸の中に求めるという問題が提起されるが、これらについての考察は今後の課題としたい。

.....  
**【著者紹介】**

嶋田洋一郎 (SHIMADA Yoichiro) 九州大学大学院・比較社会文化研究院教授。専門は18世紀ドイツ文化思想史、ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー研究。  
.....

**【注】**

1 以下、ヘルダーの作品からの引用は、『ズプハン版ヘルダー全集』(J.G. Herder: *Sämmtliche Werke*. 33 Bde. Hg. von B. Suphan, Berlin: Weidmannsche Buchhandlung 1877-1913) に拠り、巻数、頁数の順に本文中の括弧で示す。

2 この時代における翻訳に関する近年の論考としては、アントワーヌ・ベルマン『他者という試練 ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(藤田省一訳、みすず書房、2008 [フランス語原著 1984]および Elena Polledri: *Die Aufgabe des Übersetzers in der Goethezeit*. Tübingen: Narr Verlag. 2010 が特に注目に値する。

3 ヘルダーのこの文章は、ハーマンの『美学提要』(1762)における次の文章を下敷きにしていると思われる。「創造とは、被造物を通じての被造物への語りかけである。くげに、この日は言葉をかの日に伝え、この夜は知識をかの夜に知らすがゆえに。>—しかし、責が(我々の内ないし外の)いずれに存するにせよ、自然のうちには乱れに乱れた詩句、またく切り刻まれた詩人の肢体>の他、何ものも我々の用のために残されていない。それらを拾い集めるのは学者に、それらを解釈するのは哲学者に、それらを模倣するのは—あるいはより大胆に語って—それらを組み上げるのは詩人に、各々委ねられた職分である。」(『北方の博士・ハーマン著作選・上』川中子義勝・訳、沖積社、2002、pp.119-120)。

4 この問題については、拙著『ヘルダー論集』(花書院、2007)「第五章 1 『断想集』におけるドイツ語の問題」を参照。

5 これについては、前述の拙著『ヘルダー論集』「第二章 2 方法論としての古典修辞学」を参照。

**【参考文献】**

Polledri, E. (2010). *Die Aufgabe des Übersetzers in der Goethezeit*. Tübingen: Narr Verlag.

Suphan, B. (Ed.) (1877-1913). *Johann Gottfried Herder. Sämmtliche Werke*. 33 Bde. Berlin: Weidmannsche Buchhandlung.

Zeller, M. (Ed.) (1982). *Weltliteratur. Die Lust am Übersetzen im Jahrhundert Goethes*. Marbach: Deutsche Schiller-Gesellschaft.

嶋田洋一郎 (2007) 『ヘルダー論集』 花書院

ハーマン (1762) 『美学提要』(川中子義勝・編訳『北方の博士・ハーマン著作選・上』沖積社、2002、pp. 119-120)

ベルマン、A (2008) 『他者という試練 ロマン主義ドイツの文化と翻訳』(藤田省一・訳) みすず書房

## Herder und die Übersetzung

Yoichiro Shimada

Herder war einer der bedeutendsten Literaturkritiker und Dichter, die sich im Deutschland des 18. Jahrhunderts mit dem Problem der Übersetzung sowohl praktisch als auch theoretisch eingehend beschäftigten. Schon seinen literarischen Anfang “Gesang an den Cyrus” (1762) schmückte er mit dem fiktiven Zusatz “aus dem Hebräischen von einem gefangenen Israeliten übersetzt“, was zeigt, wie sehr ihn das Phänomen der Übersetzung faszinierte. Herders Übersetzungstätigkeit reicht denn auch so weit, wie es in seinen theoretischen Bemerkungen zur Übersetzung in “Fragmenten” (1767-8) und in seiner Übersetzungstätigkeit der Volkslieder (1778-9) usw. gezeigt wird.

In den “Fragmenten” sagt Herder, ein wirklicher Übersetzer müsse zugleich Philosoph, Dichter und Philolog sein. Dieser übermäßige Anspruch zeigt die Bedeutung der Übersetzung für Herder. In meinem Aufsatz soll Herders Beschäftigung mit der Übersetzung unter drei Aspekten behandelt werden. Erstens: Die Rolle der Übersetzung in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts. Zweitens: die Übersetzung als die Bewegung zur Erweiterung des eigenen Sprachraums. Drittens: die Übersetzung als schöpferische Reproduktion.

Die zweite Hälfte des 18. Jahrhunderts in Deutschland könnte als Jahrhundert der Übersetzung bezeichnet werden. Die Aufgabe des Übersetzers bestand darin zu versuchen, eine eigene Literatur mittels der Muttersprache zu schaffen. Dabei spielte Deutsch als Grundlage der eigenen Literatur eine wesentliche Rolle. Die Übersetzung trug dabei zur Erweiterung des eigenen Sprachraums bei. Herder legte in diesem Kontext das Gewicht auf die Bildung der poetische Sprache. Für ihn war die Übersetzung nicht einfach nur eine Reproduktion des Originals, sondern vielmehr ein schöpferischer Akt, der zur Etablierung des klassischen Deutschen führen sollte. Dadurch wurde die Übersetzung von einer untergeordneten Stellung zu einer eigenständigen Tätigkeit erhoben.

